

積丹町のゴミについて

考えてみよう！

一人ひとりのゴミの減量意識が高まり、ゴミは減少してきていますが、依然として、町の財政負担が大きく、更なるゴミの減量化が必要となっています。今回は、町のゴミの現状についてお知らせします。

「燃やせるゴミ」の排出量

(トン)

区分 年度	生活系 廃棄物	事業系 廃棄物	合 計
H 19	498. 8	106. 0	604. 8
H 27	374. 9	91. 2	466. 1
H 28	354. 8	85. 9	440. 7
H 29	349. 2	88. 2	437. 4

「リサイクル物」の排出量

(トン)

区分 年度	ビン類	紙 類	ペット ボトル	合 計
H 19	39. 8	101. 3	11. 5	152. 6
H 27	25. 5	65. 9	8. 6	100. 0
H 28	22. 4	63. 0	8. 2	93. 6
H 29	21. 0	58. 9	8. 1	88. 0

ゴミの現状

普段の生活で排出している「燃やせるゴミ」、「リサイクル物」は、北後志広域クリーンセンター（小樽市）に搬出して処理しています。

燃やせるゴミは、平成19年度で605トに対して、平成29年度は437トに減少し、一人当たりに換算すると、207・9kgから201・3kgと10年間で6・6kg減少しました。

リサイクル物（ビン類、紙類等）については、平成19年度で153トに対して、平成29年度は88トに減少し、一人当たり換算すると、58・4kgから40・6kgと10年間で17・8kg減少しました。

景気変動等の消費の動向や人口減少も考えられますが、町民一人ひとりのゴミ減量意識が高まってきたとも考えられます。

更なるゴミの減量化にご協力を！

平成19年4月から、広域でのゴミ処理体制へと移行し、「燃やせるゴミ」は、北後志広域クリーンセンターへ搬出し焼却していますが、当施設の維持管理のため、構成市町村から負担金（北しりべし廃棄物処理広域連合負担金）を徴収しています。

この負担金を町民一人当たり換算すると、約7千円程度の負担となります。

この負担金は、皆さんが出すゴミの重量により、負担金額が増減するため、厳しい財政状況の中で、町の負担を軽減するためには、生ゴミの水切りをしっかりと行うなど、より一層、ゴミ減量化の努力が必要となります。

北しりべし廃棄物処理広域連合負担金と町民負担の現状

区分 年度	人口 (人)	負担金 (千円)	町民1人 当たりの負担 (円)
H 27	2, 229	15, 577	6, 988
H 28	2, 222	17, 634	7, 936
H 29	2, 171	14, 914	6, 869

※人口：4月1日現在（住民基本台帳）

そのためには、町民、事業者、行政が一体となり、3R（リデュース…発生抑制、リユース…再利用、リサイクル…再利用率）を徹底し、ゴミの発生抑制・減量化・資源化を推進しなければなりません。

ゴミの減量や限りある資源を繰り返し利用する「循環型社会」を地域全体で形成するため、更なるゴミの減量化について、ご理解とご協力をお願いします。



～神威岬灯台点灯 130 周年記念映画上映会～

「喜びも悲しみも幾歳月」

“灯台守”の苦難の 歴史を後世に！

1888年（明治21年）8月に北海道で5番目の灯台として点灯した「神威岬灯台」。昨年6月に「恋する灯台」に認定、今年6月には、「政府の重点公的施設」にも登録され、8月に灯台点灯130年を迎えました。

それを記念した映画上映会が、11月22日、総合文化センターで行われ、多くの人が鑑賞に訪れました。

1957年に公開された映画「喜びも悲しみも幾歳月」の上映や北海道の灯台パネル展、西洋式灯台28基のペーパークラフト展も行われました。

映画は、海を守るため、日本各地の灯台を転々としながら厳しい駐在生活を送る灯台守の夫婦を描いた内容で、神威岬灯台でも、断崖絶壁にある灯台を守るために殉職した灯台守とその家族の苦難の歴史があり、訪れた人たちは、映画の主人公と、当時の神威岬灯台の出来事を想像しながら鑑賞していました。

またこの日は、「神威岬灯台名誉灯台長」の称号授与式も行われ、余別郵便局員として活躍した、吉田好雄さん、新井田優幸さん、三浦和敏さんと、灯台の電気ケーブルの点検や発電機の交換などを行ってきた、新井田孝さんの4名に、梶山裕司小樽海上保安部長から名誉灯台長の称号が贈られました。



みんなで走った努力の証 - 余別小 -

「北海道マラソン完走賞」を受賞！

余別小学校（代永研校長・児童8名）は、11月21日、余別小学校で勝木後志総合振興局長から「北海道マラソンチャレンジキッズラン完走賞」の賞状と記念品が贈られました。

同校は、北海道マラソンチャレンジキッズランの「チームラン」（一人ひとりがマラソン当日までに走った距離を合計して42.195kmのフルマラソンを達成する）に参加し、見事全員で走り切りました。

同校では、「子どもたちの体力がない」といった保護者の声を受け、なわとびや一輪車、マラソンなどの朝活動を行ってきました。今年度からは「余別つ子パワーアップチャレンジ」と称した取組を始め、教員・保護者の協力のもと、児童の体力・持久力・精神力を伸ばすため、放課後に全校児童でマラソンを行い、8人が走った合計距離は約185kmにもなります。

6年の野宮瑠香さんは「8人全員で協力し合いながら走ることができました。この賞をもらうことができてうれしいです。」と、この受賞を喜んでいました。また、学芸会で発表した「リズムなわとび」を勝木振興局長の前で披露し、これまでの児童たちの頑張りや素晴らしい発表に大きな拍手が送られていました。

